2005.10.27更新

『火の鳥』エジプト・ギリシヤ・ローマ編

火の鳥は　天国にかわれていた鳥です　地上にあこがれて下界(げかい)へやってきました　そして銀(ぎん)のたまごをうみました　ダイアと王子は洪水(こうずい)からたまごを守りました　火の鳥はお礼に大切な自分の生き血をふたりにのませたのです　やがてたまごがかえって子どものチロルが生まれました　でも　おかあさん鳥は　まもなく死んで……　チロルはみなしごになりました　それをやさしくかばって助(たす)けるのは　ノロ　ヨタ　ポポの三びきのけものでした〔ギリシヤ編プロローグ65～66頁〕

ここで登場する火の鳥は、たまごから孵化した幼鳥から描かれています。この火の鳥には「チロル」という女の子の名前が付けられていること、天国から下界に舞い降りた母鳥としばしの親子関係が持たれています。

また、火の鳥「チロル」を助けるノロ(亀)・ヨタ(狐)・ポポ(兎)の三びきのけものも、人間のことばを話せ、火の鳥の血をなめた生き物として三〇〇年も生き続けてきているのです。このうち、ヨタですが、黎明編(未完)では、猿として描かれています。これが、なぜ狐へと置換したのか？みなさんの意見をお書きください。

ここで、文献資料を読むということから、初期作品における「手書き文字」を探ってみることとしましょう。

〇手紙文「スパルタ国王どの　ヘレナ姫を　かえしてほしくば　ダイアと　宝ものを　トロヤ国へもってこい　トロヤ国王子より」〔ギリシヤ編5・82頁〕

ことばあそびの表現

「たいへんだ　たいへんだ　へんたいだ　たいへんだ　たいへんだ　だんへんだ　いへんたい　へんたい」〔エジプト編12頁〕

火の鳥チロル「あたしはね　人間につくづくいやきがさしたのよ」〔189頁〕

止め